平成28年度認知症地域支援推進員研修
Ⅱ認知症の人とその家族の支援体制の構築及び
認知症ケアの向上を図るための取組みの推進
『支援体制構築（事例②）』

自助から互助へ

～認知症サポーター養成講座からの展開～

北海道・砂川市
砂川市地域包括支援センター
管理者・高橋　聡

北海道砂川市基礎情報

人口	17,767人	65歳以上人口	6,396人
高齢化率	36.0%	第6期介護保険費	4,600円
要介護認定者数	1191人	要介護認定率	18.62%
日常生活圏域数	1	包括数	直営：0　　委託：1
認知症地域支援推進員数：　　1名（うち行政：　名、直営：　名、委託：１名）			
地域の特徴：　東西に約10.5km、南北に約12.7km、総面積は78.68平方kmとコンパクトシィティー。中央には北海道の大動脈である国道12号のほか、JR函館本線や道央自動車道がそれぞれ南北に伸び、昭和59年に環境省よりアメニティータウンの指定を受けた。市民１人当たりの公園面積日本一となっている豊かな緑と水に囲まれた街(公園の中に街がある様な風景)となっている。			

北海道立こどもの国

さあ、どれにしますか？

こだわりの逸品をお楽しみください。

Sweet Shop［菓子店］

1 ナカヤ

＊国道12号沿い
砂川市東1条南10丁目 TEL(0125)52−2575

数量限定、特製「アップルパイ」

新鮮な「生」の富士リンゴを産地から直送し、「生」本来の食感・味を残して煮上げ、パイに使用。生地はもちろん手折りのサクサク感。ご予約の電話があれば、確保OK。なお、リンゴが収穫されない9月・10月は季節限定「新栗いっパイ」が登場します。

＜営業時間＞9:00〜18:30［月曜定休］

2 いよだ

●本店（国道12号沿い）
砂川市東1条南2丁目 TEL(0125)52-2015
●支店（ショッピングプラザ アイアイ内）
砂川市東1条南1丁目
http://iyoda-seika.com/

和の素材が織り成す絶妙の味、「みちくさ」

丹念に焼き上げた和風のカステラに「あん」をロールケーキのようにして挟み込んだ「みちくさ」。あんはつぶあんとしそあんの二種類、カステラはあんに合せて生地の色も味も変えている。

＜営業時間＞
本　店／8:30〜19:45
アイアイ店／9:30〜20:00
※本・支店とも年中無休（元旦のみ休み）

3 プチ・トリフ山屋 北光本店

＊国道12号沿い
砂川市西1条北9丁目 TEL(0125)52-3477
http://pt-yamaya.jp/

ロングセラーのデニッシュペストリー「シベリア」

創業者の思い出と重なるシベリア鉄道の枕木から名を取った「シベリア」。カステラの上に「あん」を載せ、デニッシュペストリーの生地を巻いた創作パンは30数年のロングセラー。

＜営業時間＞北光本店／8:30〜19:00［年中無休、1月1日・2日休み］

4 ほんだ

●本店（国道12号沿い）
砂川市西1条北11丁目 TEL(0125)52-6321
●砂川アイアイ店（国道12号沿い）
砂川市東1条南1丁目 TEL(0125)52-2334

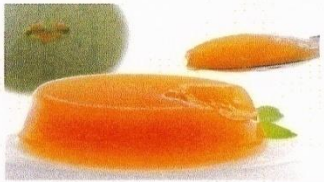
りんごとマドレーヌ風の生地のハーモニー「ふくろがけ」

「りんご」本来のおいしさを活かしながら蜜付け加工した素材を、マドレーヌ風生地で包み焼き上げた「ふくろがけ」。りんごの実ひとつひとつに紙をかぶせるやさしさと似た美味しさをどうぞ。

＜営業時間＞本店／9:00〜19:00
砂川アイアイ店／9:30〜19:00
［年中無休、元旦のみ休み］

ホリ

砂川市西1条北19丁目2-1 TEL(0125)54-2231
http://www.e-hori.com/



芳醇な香りとみずみずしさ、もうひとつの夕張メロン「夕張メロンピュアゼリー」

夕張メロンの完熟果肉を使用し、味、香り、食感ともに夕張メロンそのものの美味しさを楽しめる、北海道スイーツの定番です。

＊次のお店でお求めください
●砂川ハイウェイオアシス館内
●ショッピングプラザ　アイアイ
●コープさっぽろ砂川店
●砂川パークホテル

5 北菓楼

●本店（国道12号沿い）
砂川市西1条北19丁目 TEL(0125)53-1515
●砂川ハイウェイオアシス館店
砂川市北光336番地 TEL(0125)53-2645
http://www.kitakaro.com/

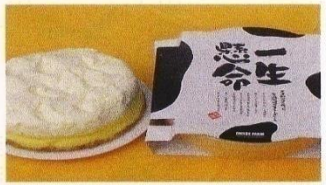
「夢不思議」はパイ生地使用のジャンボなシュークリーム

人気のジャンボパイシュークリーム「夢不思議」。口に広がる、こだわりのカスタードクリームは「もっと食べたい！」という気持ちに応えてくれる嬉しいボリューム。

＜営業時間＞本店／9:00〜19:00
ハイウェイオアシス館店／
9:00〜19:00（4月〜10月）、
9:00〜17:00（11月〜3月）
［年中無休、元旦のみ休み］

6 岩瀬牧場

●岩瀬牧場
砂川市一の沢237番地6 TEL(0125)53-5071
フリーダイヤル(0120)113-529
●ファームレストラン「リヴィスタ」
砂川市一の沢237番地6 TEL(0125)56-2166
http://www.iwasefarm.co.jp/



3層になった感動のおいしさ、生チーズケーキ「一生懸命」

1層目にグラハムクッキー、2層目はやさしいスフレ、3層目には独特の風味を誇るフロマージュクリーム。3つのおいしさが倍にふくらむ。原材料には自前の牧場で搾った牛乳を使用。

＜営業時間＞岩瀬牧場／9:00〜18:00（7・8月は19:00まで）
［年中無休］
ファームレストラン リヴィスタ／11:30〜21:00
［水曜日定休］

7 吉川食品（工場でも直売いたします）

砂川市東豊沼26番地 TEL(0125)54-1611
http://www.yoshikawafoods.co.jp/

北海道の豊かな恵みが「おはぎ」になった

海外を含め、全国各地のスーパーや量販店を通じて"おはぎ""大福餅"を販売しています。厳選した小豆を使い、独自の製法で作る「おはぎ」は冷凍保存が可能、解凍後も作り立てのおいしさが楽しめます。

＜営業時間＞9:00〜17:00
［土・日曜、祝日定休］

すながわスイートロード協議会の活動について

「すながわスイートロード協議会」が誕生したのは、平成14（2002）年。おいしいお菓子のパワーをコアにして、町全体をもっと元気にしたいというメンバーによって結成され、スタッフには市民の方もいます。

協議会では、住民のためのお菓子の講習会を開いたり、野外で植木鉢を使った「野焼きパン」のイベントなどを開催。また、すながわスイートロード協議会主催だった「ジャリン子ハロウィン」は、10月にかぼちゃのランタン（提灯）を商店の店先に飾るもので、今では町全体で取り組むイベントに成長しています。

特に、すながわスイートロードのお菓子・約30種が交流センターに大集合する「スイーツフェスタ」は毎年大人気。さらに札幌や旭川から足を運んでもらうスイートロードのおいしさを味わう日帰りバスツアーの企画にも協力し、砂川ならではの元気な町づくりに貢献しています。

ほかにもスイートな魅力がいっぱいのスポットをご体験ください。

基幹産業は・・・・・

～北海道砂川市での認知症施策の流れ～

砂川市立病院　もの忘れ外来診療開始(H16.3)

スクラム診療（精神神経科・脳神経外科神経内科）による診断　治療は「かかりつけ医」→病診連携

中空知・地域で痴呆症を支える会発(H16.4)→同年12月認知症へ名称変更

認知症啓発・認知症ケア向上 →　多職種連携(医療・介護連携)

中空知・地域で認知症を支える会がＮＰＯ法人認証（Ｈ21.2）

多職種連携の強化　→　事業委託など、活動の幅が広がる

砂川市立病院　認知症疾患医療センターモデル事業(H22.6)

認知症疾患医療センターに専従の精神保健福祉士が配置される。
認知症医療連携協議会(NPO法人　中空知・地域で認知症を支える会が兼ねる)設置

砂川市地域包括支援センター　認知症対策連携強化事業受託(H23.1)

砂川市地域包括支援センターへ認知症連携担当者の配置

砂川市立病院　認知症疾患医療センター本指定/砂川市地域包括支援センター　認知症対策総合支援事業委託(H24.4)

認知症医療連携協議会の拡充（中空知→全空知へ）/認知症連携担当者　→　認知症地域支援推進員へ

認知症初期集中支援事業委託(H26.7～)

砂川市地域包括支援センターに設置。チーム員は福祉職は地域包括支援センターの主任介護支援専門員
医療職については認知症疾患センターより認知症看護認定看護師を派遣(双方とも兼務)
サポート医は認知症疾患医療センター長(専門医)を配置する。

認知症を身近にする試み
～北海道砂川市での認知症啓発の流れ～

市民健康フォーラム（H16~）

市民に対する啓発活動として著名な講師を砂川市へ招き「認知症をあきらめない」をテーマに実施する講演会(砂川の「夏の風物詩」となっている。）

認知症を抱える家族の会「ひだまりの会」設立(H19～)

保健事業だった「若葉の会(家族の会)」をふれあいセンター、包括、社協との協働で自主組織化。
ひだまりの会定例会及び役員会（月１回）への支援の継続(ニーズの把握として)

認知症サポーター養成講座（H20~）

1年間で500名の認知症サポーター養成を目指してゲリラ的に実施。

認知症ボランティア養成講座(H21～)

マンパワーの育成プログラムの実施　→　養成講座は「ぽっけ」が引継ぎ各地で実施(後方支援を実施)

認知症支援ボランティアぽっけ設立(H22.4～)

ボランティア養成講座受講者が設立→有償ボランティア活動として展開→ボランティア養成講座実施
月１回の定例会への支援

認知症基礎講座(H22～)

認知症啓発の中級講座（週1回、4～5回連続口座）として位置づける　→　砂川市のみならず中空知圏域へ拡大（奈井江町、歌志内市、芦別市等）で包括の協力により実施

NPO法人　中空知成年後見センター設立（H25~）

市民後見人養成講座を受講した方が法人後見実施のため設立。積極的な支援(理事として)を実施

認知症カフェ　スタート(H26.10)

家族会との共催、商店街との共催等の多様なスタイルにて実施

認知症啓発活動に取り組むきっかけ

日々の総合相談支援業務を通じて

1）認知症を発症した方の近所からの声

- 地域住民の認知症に対するネガティブな感情
- 地域住民の排除する姿勢

何か変な行動をしているぞ!

認知症になったら何もできなくなるんだろ～

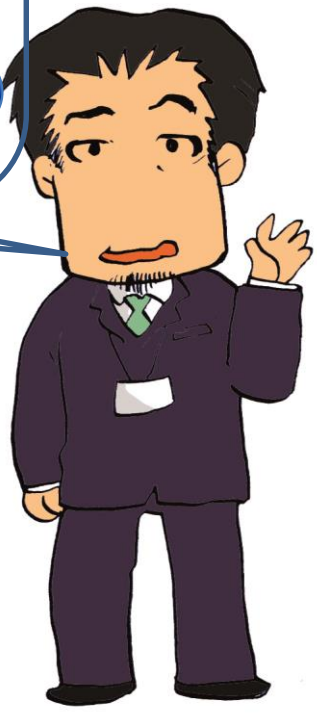
認知症になったらお終いなんだよな～

認知症になったら自宅は無理!近所迷惑だ～

認知症になったら自宅は無理!近所迷惑だ～

何とかしたいべさ～

（北海道弁）



2) 認知症の方を介護している介護者(家族会)からの声

- 地域の方々に理解してもらえない。
- 地域の方々に理解してもらいたい。
- でも・・地域には認知症に興味を持っている人も多いとの情報

課題解決ら向けて、大切にした考え方・姿勢

認知症について理解していない。

↓

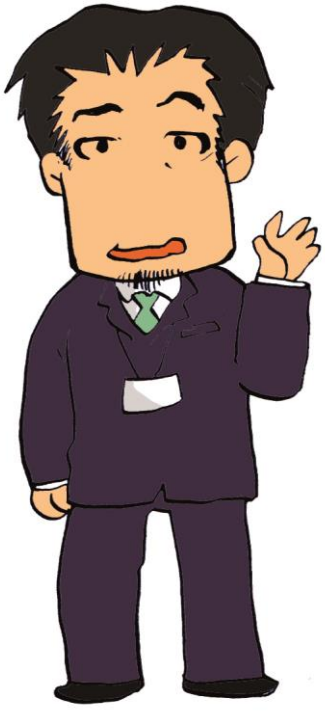
認知症について正しく
理解できていない。

↓

認知症について正しく
理解して欲しい。

↓

そんな地域って「素敵じゃない」



悪魔のささやき！

砂川市立病院　もの忘れ外来開設(H16.3)

北海道新聞　2004年（平成16年）4月25日（日曜日）

空知人

砂川市立病院に一月、痴呆の早期発見や治療に当たり、家族の介護の負担軽減を図る「もの忘れ専門外来」が開設。精神神経科、神経内科、脳神経外科の医師がスクラムを組み、心身両面から患者や家族を支える。立ち上げに力を注いだ内海久美子医師は「高齢社会。医療、福祉、介護関係者が一丸となった患者を支えるネットワークづくりが求められている」と訴える。（滝川支局　石丸厚子）

もの忘れ専門外来を開設

砂川市立病院の精神神経科医
内海　久美子さん(48)

痴呆早期治療、全力で

1955年、旭川市生まれ。北大、札幌医大卒業後、同大付属病院などを経て96年から砂川市立病院勤務。アルツハイマー病の研究に従事、同年医学博士号を取得した。老年精神学の専門医。砂川市内で夫と２人暮らし。もの忘れ外来は空知医師会の相談医からの紹介が原則。完全予約制。

―もの忘れ専門外来を持つ病院はまだ少ないそうですね。

「本人に自覚があり、家族が痴呆に気づいても、実際に病院に来る人は少数。もの忘れぐらいで行けないとか、『年のせいだから』と、治療を受けず、症状が悪化してから駆けつけるケースがほとんど。とはいえ、患者から見れば、精神科に行けばいいのか、脳外科なのか、別の診療科なのか、相談場所がわかただける専門外来なんですよ」

―三科の医師がスタッフを組んで診察するのですか。

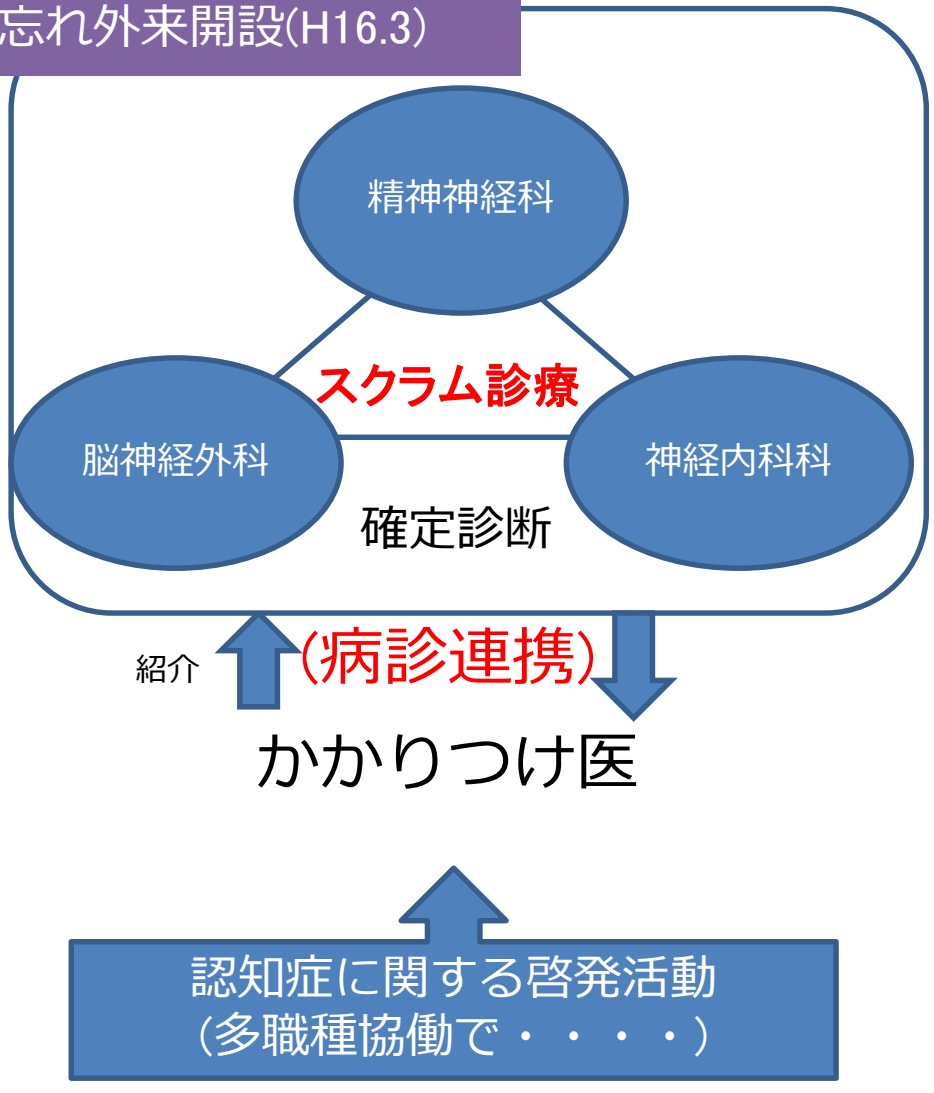
「精神神経科、神経内科、脳神経外科の医師がそれぞれの分野から多角的に診察します。精神神経科は会話や質問を通して記憶力や精神症状を評価、老化か痴呆かを判断します。神経内科は手の震え、反射、目の動きなどを検査、脳外科は脳の変化を画像から診る。三科の医師と放射線技師が見解を出し合い、最善の治療方針を決めます」

―家族の負担を軽減する方法は。

「患者本人の診察が半分、介護をする家族の話を聞き労をねぎらったり、介護のアドバイスをしたりするのが半分。例えば、食事後すぐに催促するもの忘れ症状にざっき食べたでしょう』と否定すると、互いに怒りのエネルギーが高まってしまいます。『今作るからね』と優しく言って忘れてもらうことが一番。否定ではなく共感することがポイントなのです」

―四月には「中空知・地域で痴呆を支える会」が発足。医師の役割が増しそうですね。

「札医大の同期で砂川市立病院の高橋明医師（脳外科）と二人で『患者が住宅で長く生活するには、福祉、介護関係者とのネットワークを築かなければ』と話していました。私は北大で発達心理学を学んだ後、医学的知識を得るため、札医大に入り直しました。そこで、老年精神学に出会った。痴呆患者が、最後まで豊かな生活を送るためには在宅の介護力と地域の理解がカギ。その手助けがしたいのです。医師や介護ヘルパー、保健師が互いに情報を共有、横のつながりを持った治療が必要です。会では痴呆のことをよく知ってもらうため、PR活動に力を入れます。地域で支え合うことが大切なのです」

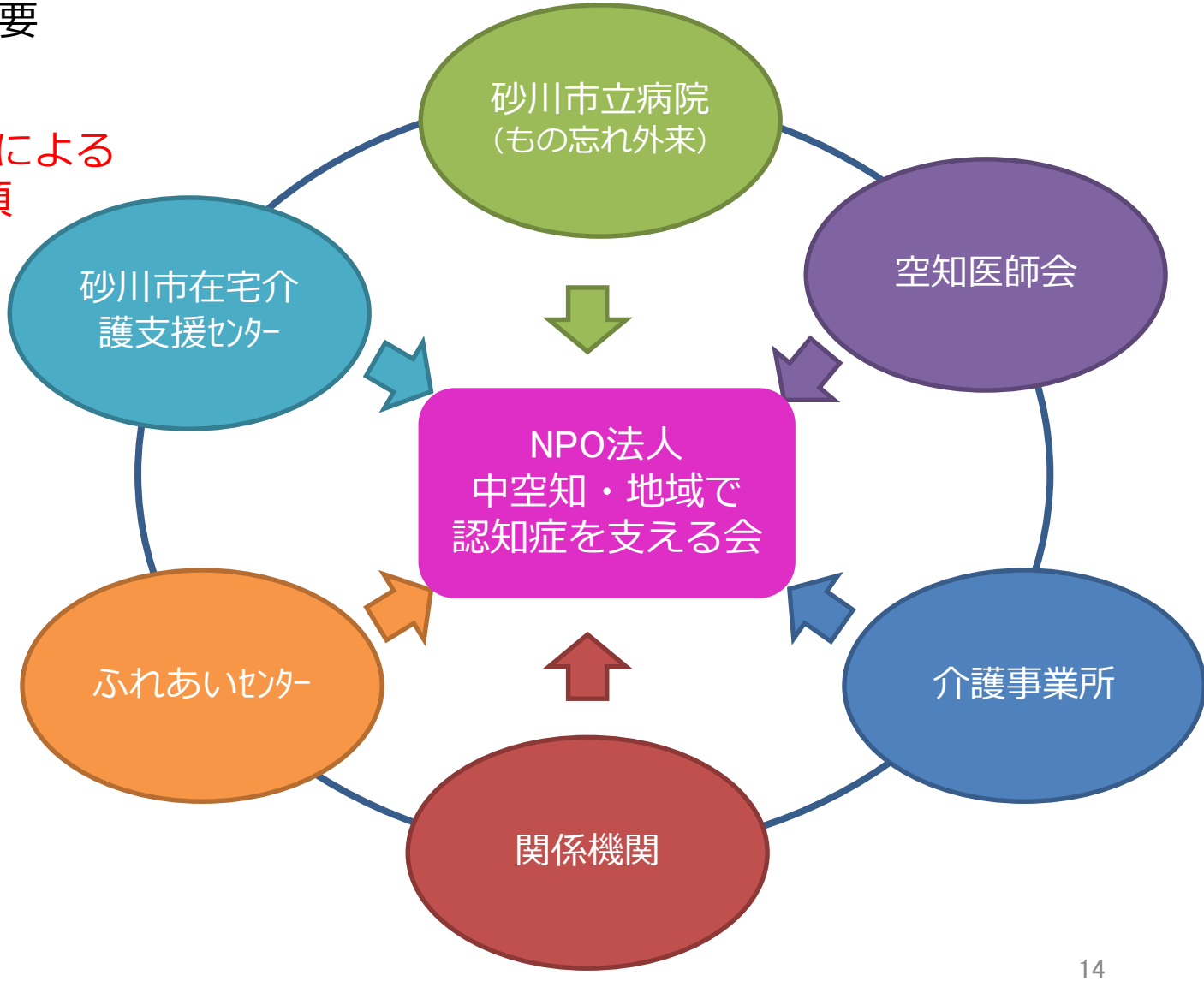


病院完結型ではなく地域を
巻き込んだ支援が必要

病診連携/多職種協働による
地域支援の展開が必須

任意団体設立(H16.4)

NPO法人化(H21.3)



中空知・地域で痴呆症を支える会発足(H16.4)
→ 同年12月　痴呆症から認知症へ名称変更

新聞　2004年（平成16年）4月23日（金曜日）　空岩　空知　32

心と脳と神経の専門医が患者の治療方針を話し合うもの忘れ外来

痴呆介護 地域で後押し

「中空知・支える会」発足

砂川市立病院のもの忘れ外来中核 医療、介護が連携

【砂川】痴呆のお年寄りとその家族を支える「中空知・地域で痴呆を支える会」（小泉洌代表世話人）が、このほど発足した。砂川市立病院もの忘れ外来を中心に、周辺市町の病院や診療所の医師、福祉関係者らが連携し、心身両面からの総合的な診断をもとに、医療と介護スタッフが最善の対応策を考える。

同市立病院精神科の内海久美子医師は痴呆につ いて、「完治はできないが、薬などで進行を遅らせることは可能」と話し、早期治療の重要性を訴える。しかし本人やその家族は「年だから仕方がない」「検査は大げさ」「相談相手がいない」などと治療を受けず、病状を悪化させがちだ。

中空知の高齢化率（六十五歳以上の高齢者が人口に占める割合）は、上砂川や歌志内が35％を超すなどいずれも高く、対策が急務だった。このため同市立病院は今年一月、空知医師会の協力を得て、もの忘れ外来を開設。さらに砂川、奈井江など二市三町の医療機関の関係者で、相談窓口となる仕組みをつくった。

このうち十六で三月、「支える会」の世話人会を発足させた。

痴呆対策では地域のネットワーク化がカギとなるだけに、市民の理解も欠かせない。このため「支える会」は、六月五日に市民健康フォーラムの開催を予定。PRに力を注ぎ、家族らを巻き込んだ本格的な組織に育てていく方針だ。

「もの忘れ外来」は完全予約制で、これまでに二十人が受診。患者についての情報は、医療機関と在宅介護などに当たる福祉関係者の間で共有さ

中空知・地域で痴呆症を支える会

（山村晋）

認知症啓発・認知症ケア向上
↓
多職種連携(医療・介護連携)

2009年（平成21年）3月7日（土曜日）

NPO法人の認定証を手にする小泉理事長（中央）と内海理事と汐見康雄理事

中空知・地域で認知症を支える会

活動拡大へNPO化

ボランティア団体発足へ

【砂川】専門医や開業医などが連携して認知症のケアに取り組む「中空知・地域で認知症を支える会」（小泉洌会長）が、このほどNPO法人の認可を受けた。法人格を得たことで寄付などが募りやすくなるほか、夏には認知症ケアのためのボランティア団体の発足を目指しており、活動のすそ野拡大を目指す。（野呂有里）

同会は二〇〇四年、精神神経科、脳神経外科、神経内科の三科が共同で認知症を診断する砂川市立病院の「もの忘れ外来」の開設に合わせて発足した。以来、専門的な診断を行う同病院の医師や患者の在宅療養を支える開業医、介護職員が参加して、研修会や市民講座を開き、認知症の理解を広める活動を続けてきた。

新法人では同会の小泉会長が理事長となる。小泉理事長は、「寄付などの面で活動への理解を求めやすく、会として活動に継続性を持たせることができる」と法人化のメリットを説明。「認知症患者同士で介護を行う「認知症介護」の例も多く、幅広いニーズに応えたい」と話す。

同会が開講するボランティア養成講座は、これまで約五百人が受講している。内海久美子理事は「認知症ケアのニーズにあった活動ができるボランティア団体を夏ごろには立ちあげたい」と意気込んでいる。

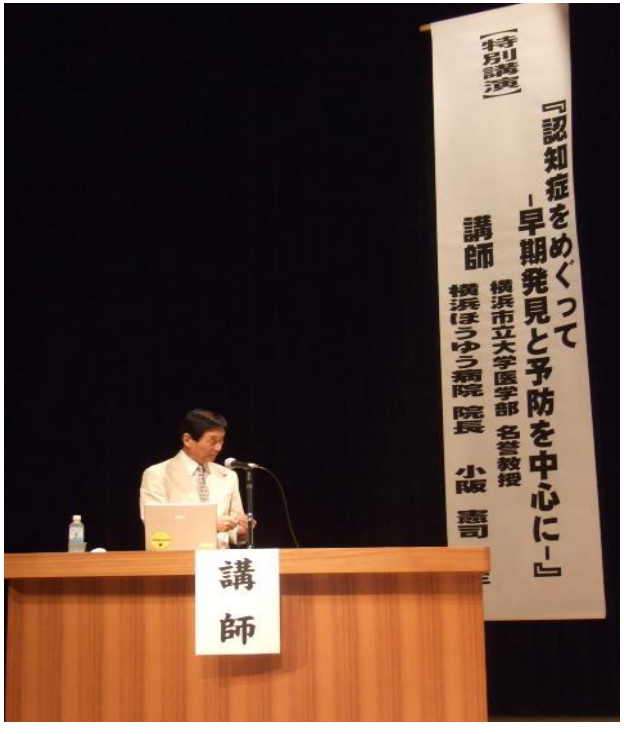
多職種連携の強化
↓
事業委託など活動拡大

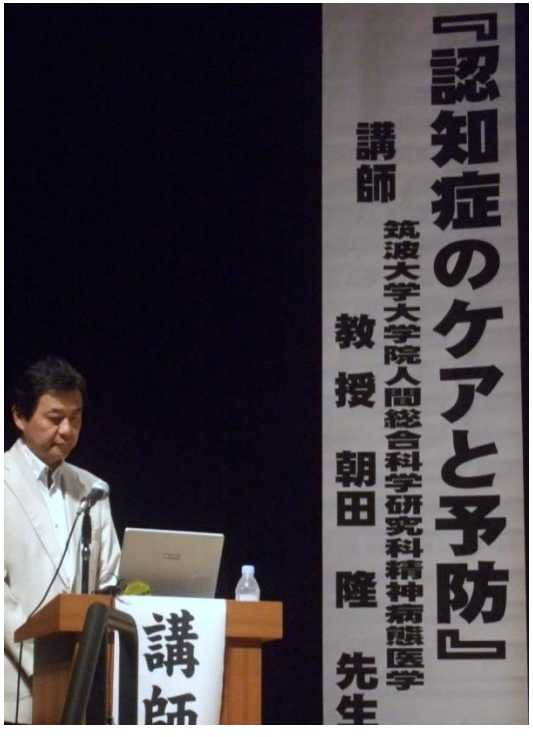
認知症啓発活動の流れ①

「認知症をあきらめない」をテーマに市民健康フォーラム開催(年１回)

↓

早期発見・早期対応の必要性の周知(自分自身の問題)





市民健康フォーラム特別講演

・第１回　愛媛大学医学部　精神神経医学講座　池田　学助教授
・第２回　埼玉医科大学総合医療センター　精神神経科　深津　亮教授
・第３回　北海道医療大学　精神看護学　阿保　順子教授
・第４回　札幌医科大学　保健医療学部　作業療法科　池田　望教授
・第５回　東北大学加齢医学研究所　川島隆太教授
・第６回　横浜市立大学医学部　名誉教授　横浜ほうゆう病院　小阪　憲司院長
・第７回　筑波大学大学院　人間総合科学研究科精神病態学　朝田　隆教授
・第８回　鳥取大学医学部保健学科　生態生制御学講座
環境保健分野　浦上　克哉教授
・第９回　秋田県立脳血管研究センター　神経内科　部長　長田乾先生
・第10回　京都府立医科大学　名誉教授　中島健二先生
・第11回　群馬大学医学部保健学科　教授　山口晴保先生
・第12回　公益財団法人北海道勤労者医療協会勤医協中央病院
名誉院長　伊古田　俊夫先生

＊所属等については市民健康フォーラム開催時のものとなっています。

市民フォーラムの様子

「認知症に興味を持っている人が増えてきた・・・」

認知症啓発活動の流れ②

認知症サポーター養成講座！

身近啓発活動「　自分自身　＋　身近な人も・・」(認知症啓発の入口として)

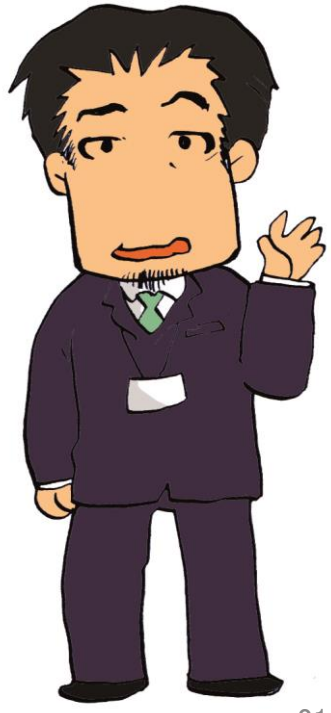
大切にしたポイント

- 中核症状について → **障害によって生活がしずらくなる**
- 認知症は「病気」である事
- 大切な事は早期発見・早期診断・早期治療！
  （もの忘れ外来<精神神経科>への受診）

↓

精神神経科に対するイメージの払拭
（地域住民も、そして私も！）

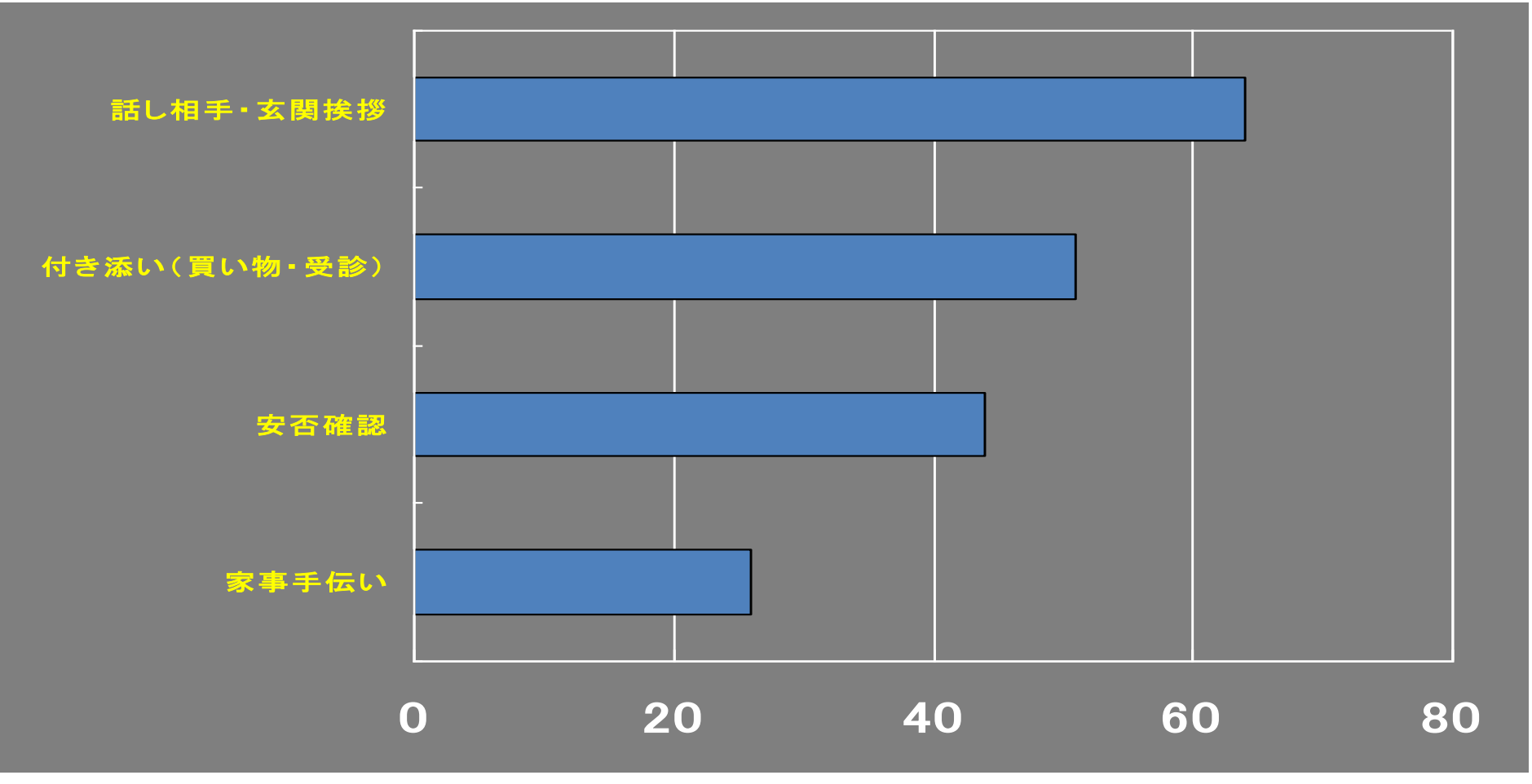
１年間で認知症サポーター500名（近く）を養成！



認知症支援ボランティア養成講座（現　認知症基礎講座）

認知症支援ボランティアに対する要望アンケート

（調査期間:H21年2月1日～3月31日　　回答者数:46名　複数回答）



＊介護保険ではサービスできない“すきま”の支援

認知症基礎講座

認知症基礎研修の内容

認知症の理解

認知症の方との関り

コミュニケーションから考える認知症

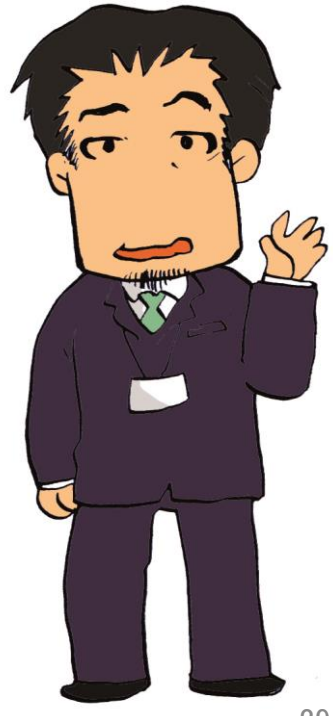
GW　振り返りと今後について

認知症基礎講
ケアマネ
家族会会長
ボランティア会長
民生委員

町内会長としてこんな活動しているとこんな事があるんだよ。
民生委員としての活動しているとこんな事に気が付くのよ！
家族の会としても市民の皆さんに伝えたい事が多いの。

学習する事で興味が
更にあがったわ～
色々な活動を通
じて気が付くこ
とがあるのよ。
自分の出来るこ
となら「お手伝
い」ができそう。

知識を活かしたい、何かしてみたい！



認知症支援ボランティア団体
“ぽっけ”設立　H22.4.26

ドラえもんの“ぽっけ”のように
いろいろな要望に即時対応する

2011年（平成23年）1月6日（木曜日）　北海道新聞　空知

●2011そらち● 連携で飛躍 ②

砂川市立病院

役割分担促し患者支援

昨年12月下旬。滝川市の福祉施設職員金打（かなうち）友子さん(66)は、市内の病院前で老人施設に入居している85歳の女性を出迎えた。女性の診察に付き添い、会計を済ませるまで約2時間、家族の話をしたり、女性の思い出話を聞いたりした。診察の時に医師の指示を書き取った紙を渡し、女性をタクシーに乗せると「またね」と見送った。実はこの日、老人施設職員の手が足りなくなり、金打さんが代役を務めたのだ。

留守番役も

金打さんは、認知症患者と家族を支援するボランティア組織「ぽっけ」の会員。ぽっけは、砂川市立病院の専門医らでつくるNPO法人「中空知・地域で認知症を支える会」の呼び掛けで昨年4月に発足した。滝川、砂川、赤平の各市や奈井江町などの主婦ら24人が認知症患者の受診に付き添うほか、家族が買い物などで外出する際には患者と一緒に留守番を務めるなどの活動をしている。

「支える会」の理事で同病院の精神保健福祉士大辻誠司さん(47)は「自治体単独の医療、福祉には限界がある。地域の各機関や住民が連携し、役割を分担しながら患者を支える仕組みが必要」とぽっけの意義を語る。

時間制限はなく1回600円だが、滝川を中心に砂川、赤平の各市などで月に30回、40時間ほどの利用があり、中空知の介護現場では貴重な存在になりつつある。

運営の核となる同病院は昨年6月、国が整備を進める「認知症疾患医療センター」のモデル病院に指定された。自治体の枠を超え、早期診断や介護施設への橋渡し役を担い、中空知のかかりつけ医対象の研修会や、グループホーム運営者が情報交換する交流会も開く。内海久美子精神科部長(55)は「地域全体で認知症ケアを底上げしたい」と先を見据える。

滝川市内の病院で診察の付き添いを終え、患者を見送る「ぽっけ」の金打さん（右）

人命を優先

一方で同病院は救急医療の拠点でもある。昨年12月24日。この日、午前2時に滝川市から、同6時半には美唄市から救急車が着いた。23日午後5時から24日午前8時半までに計5台。このほか時間外外来にも19人が訪れ、3人の当直医師らが対応に追われた。

昨年10月の新本館オープン以来、救急医療体制はさらに充実した。「公立病院がある近隣自治体からも救急患者が運ばれるケースが、[illegible]増えている」（医事課）という。

人件費などがかさみ多くの病院で赤字の救急部門。同病院も例外ではない。市役所内には「近隣自治体は砂川の救急に負担金を払うべきだ」との声もない[illegible]。だが小熊豊[illegible]「負担金は当面考えない。うち（中空知）の医者で頑張[illegible]の救急医療[illegible]を持つ」と言い切る。

救急車の[illegible]待機する救急科[illegible]下嶋秀和医師[illegible]「救急は地域医療[illegible]自治体の枠は関[illegible]い治療を求める患者は断れない」と口に[illegible]

自治体間の連携を求める声がある中で、その途上にある救急医療。人命を救うため、自治体の境界を越えた患者に対し医師たちの奮闘は続く。（荒井友香）

北海道新聞H23.1.6

認知症支援
ボランティア
“ぽっけ”

1時間600円有償

会員28名

月例会の様子

活動エピソード

受診の付添い・傾聴訪問・安否確認など

・夫受診、弁当持参で昼食会
・急用で不在にする間、祖母と留守番
・通夜の夜、一晩共に過ごすボランティア
・ご指名の傾聴訪問
・男性ボランティアの活躍
・孫の結婚式に同席してほしい
・墓参りに一緒に行ってほしい

認知症啓発活動のイメージ

強

認知症への興味

弱

＜認知症支援ボランティア「ぽっけ」＞

地域の中に生きがい・役割をもって「いきいき」とした生活の実現（介護予防的な側面もあり）と「地域づくり」の実践。
同じ目的を持った仲間作りの実践

参加へのアプローチ

＜認知症基礎講座/ボランティア養成講座＞

4～5回の連続講座として実施し具体的な支援方法等について伝達する。これなら出来る、これが出来る等、GW実施により引き出す。また、参加者への承認等を実施しモチベーション向上を図る。

活動への動機付けアプローチ

＜市民健康フォーラム＞

「認知症をあきらめない」をスローガンに認知症理解の入り口で自分の問題として捉える。
（医療面が中心）

自助へのアプローチ

＜認知症サポーター養成講座＞

認知症は身近な問題として考える機会として身近な場所で実施する。
オレンジリングが仲間意識を向上。
地域で「見守る」→「繋げる」を明確に・・・・・

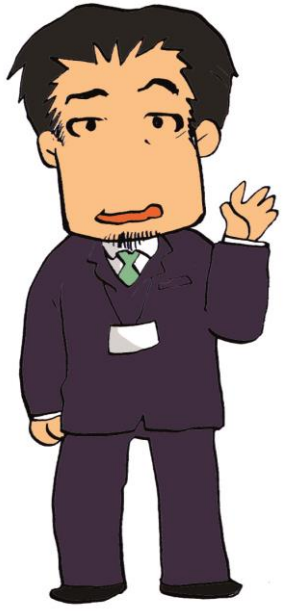
互助へのアプローチ

認 知 症 へ の 理 解

～心がけたこと～

- 一機関で取り組むのではなく、砂川市立病院、医師会など多職種での取組を実施し地道に取り組んだ

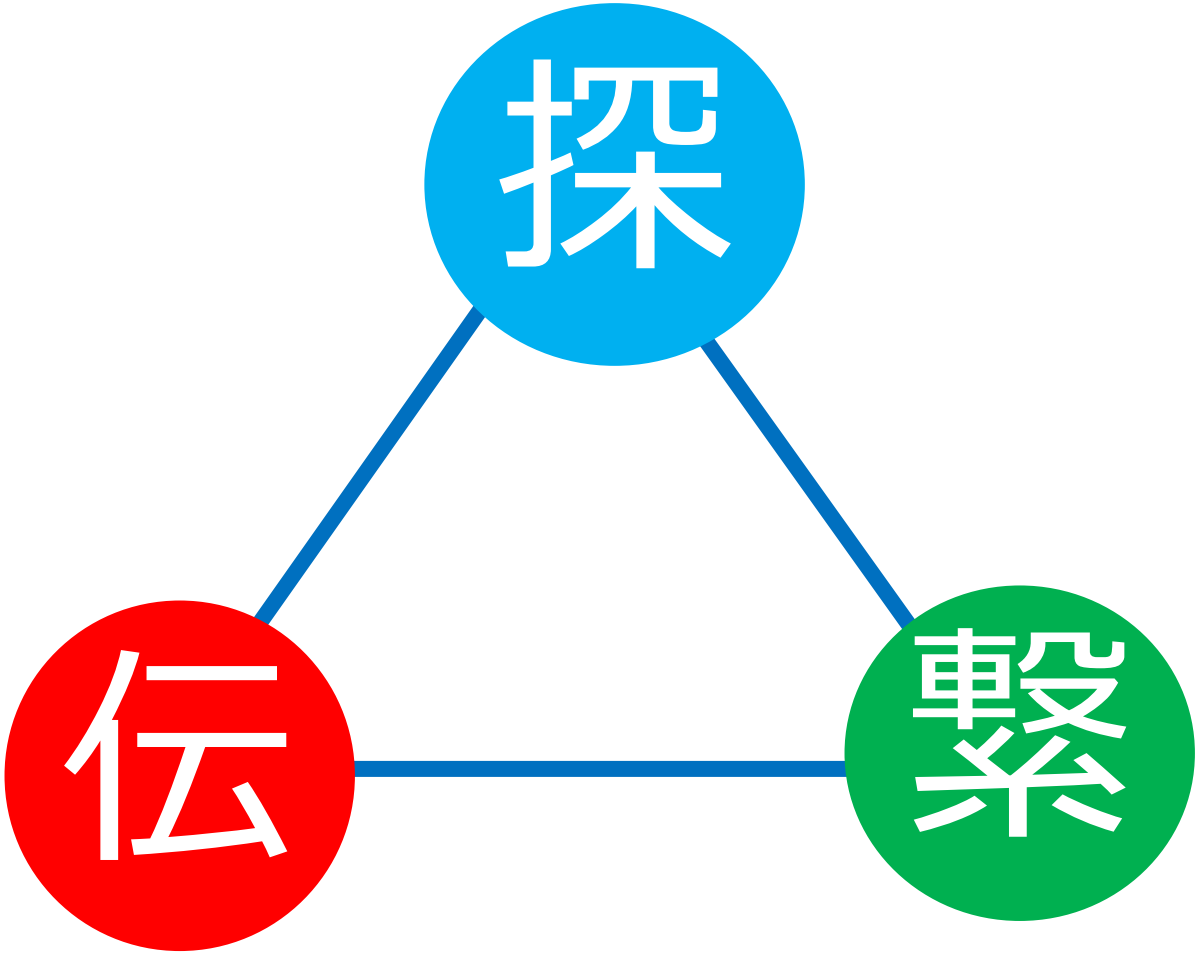
  「が」の視点ではなく「も」の視点で・・・
- 事業実施にあたっては、認知症を介護している(していた)方々から声に耳を傾けたこと
- 受講者のニーズ(もっと学びたい)に答え、ステップアップの講座を準備したこと
- 人材育成をするのではく、仲間作りを意識したこと



関わったことによる成果

- 地域で暮らす認知症の人への対応の変化
- 精神神経科への受診に対するイメージの払拭
- 研修を受講した方々が自主組織である「認知症支援ボランティア団体ぽっけ」を設立し、介護保険外の認知症の方を支えるサービスとして活躍

  (認知症ボランティア養成講座は「ぽっけ」が引き継ぎ各地で実施している。→後方支援へ)
- 「認知症ボランティア講座」の内容は「認知症基礎講座」として砂川市以外でも展開
- 認知症疾患医療センターの指定、認知症地域支援推進員の配置の他、認知症初期集中支援チーム、認知症カフェや認知症ケアパスへと繋がる「きっかけ」となった。
- 行政を巻き込んだ各種事業へ展開している。

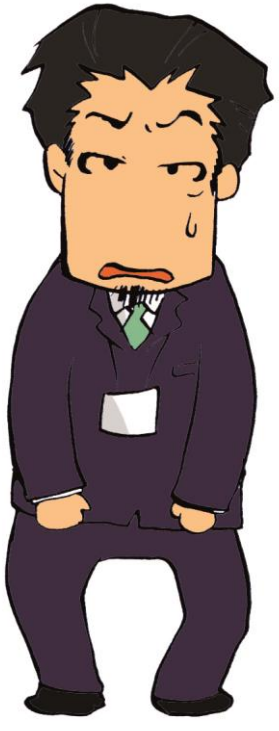

探
伝
繋

今後の取組み(予定)や さらに強化したい点

- 認知症に関する事業は「全てが繋がっている」と実感
  → 認知症施策の推進が「地域包括ケア」に繋がる。
- 認知症サポーター養成講座の地域展開
  → 入口機能として積極的展開(見守り視点の強化)
- ノウハウを活かす
  → 啓発活動は人づくり。地域住民との協働を考えた仲間作りの構築

全国の推進員さんへのメッセージ
認知症地域支援推進員の活動は「地域づくり」と重なっていると実感しています。今取り組んでいる活動が「点」だとしても、実践を続ける事で「その点」が繋がり「線」になると実感できると思います。認知症になっても安心して暮らせる地域づくりの「きっかけ」が我々の役割と思います。

ご清聴感謝します。
ありがとうございました。



一般社団法人　北海道総合在宅ケア事業団

砂川市地域包括支援センター　高橋　聡

電話　0125-54-3077　FAX　0125-54-3091

E-mail　s-takahashi@hghi.or.jp

ＮＰＯ法人　中空知・地域で認知症を支える会

ＮＰＯ法人　中空知成年後見センター

北海道砂川市へお越しください。

豊かな自然と美味しいスイーツが

貴方のお越しを待ってます。